

「ビジョンを語る会」の実施結果について

(令和2年12月末現在)

日時	時刻	人数	対象団体等
8/24(月)	13:30-14:30	15	かみ特産品クラブのグループ p.1
8/24(月)	15:00-16:00	14	多可町商工会女性部 p.3
10/10(土)	10:00-11:30	10	西脇商工会議所青年部・西脇青年会議所 p.5
10/10(土)	13:30-15:00	13	吉川町商工会 p.7
10/10(土)	15:30-17:00	8	三木商工会議所青年部 p.9
10/14(水)	15:00-16:30	20	多可町八千代区コミュニティグループ p.11
10/21(水)	14:00-15:30	11	北播磨管内農業関係者 p.13
10/21(水)	16:00-17:30	13	小野商工会議所 p.15
10/21(水)	19:00-20:15	13	加東市商工会青年部 p.17
10/23(金)	13:30-17:30	13	加西商工会議所 p.19
12/3(木)	11:00-12:00	9	兵庫教育大学子育て支援ルームのグループ p.21
12/17(木)	17:00-18:30	12	西脇市で活躍されている方 (デザイナーや播州織関係者、移住者等) p.23

「ビジョンを語る会」主な意見 かみ特産品クラブのグループ

実施日： 8月24日(月) 人数：15人

(100歳でも現役で活躍)

人生100年時代に突入している。自慢の商品「とりめしの具」の味と風味の決め手となる午房のさがきの技術をもっているスタッフのおばちゃんたちが、100歳でも現役で午房のさがきがやれたらいいなと思っている。

(特産品の販路開拓)

日本の棚田100選に選ばれた岩座神集落で育てたそば粉を使ったポリンとクッキーを販売している。ふつうのお菓子よりは高いが、お土産としては高くないので、商品価値にふさわしい販路の開拓が課題である。

(お茶から地域を学ぶ)

同じ木から紅茶もウーロン茶もできる。製法によっていろいろ変わる。地元のお茶の木を大事にして、子ども達に地元のお茶を飲んでもらいたいと思う。

(いつまでも愛されるジャムづくり)

以前スイス総領事に公使としてお勤めだったダニエルアビオラさんから「吉田さんのブルーベリージャムはとてもおいしい」と3年前から毎年30個の注文を受けて送っている。安全安心をモットーにいつまでも愛されるジャムづくりに励んでいきたい。

(東京や大阪に販路を拡大)

ニンニクがたくさんとれてそれを何とかしたいと焼肉のたれを作り始めた。年配の方が作っていた伝統食や、増えすぎて問題になっているシカ肉料理(カレー)も商品化した。東京や大阪などの大都市に販路を拡大したいという夢をもって特産品づくりに励んでいる。

(漬物をつくる大規模設備の整備)

30年後、畑にはいろいろな野菜がたくさん栽培されて、それを使った新しい漬物をたくさん作り、年間を通じて出荷できるような大掛かりな設備ができていればいいと思う。

(雇用を地元で生む)

長くこの地で愛されてきた百日鶏を30年後も守り繋げていきたい。養鶏が魅力ある職業になれば、生産加工やいろいろな分野の会社ができ、雇用が地元に生まれるのではないかと思う。

(多可町だけで遊んで食べて帰れる仕組み)

いちご狩りだけではなく、農園に滑り台とかハンモックとかを作り、いちごを買いに来てくださったお客さんにも気軽に楽しめるような施設にしたい。大人になってからも自分の子供とまた多可町に来たいと思わせる施設が理想。もう1つの希望は、若者や障害者が取り組める施設にしたい。

(ネットに頼らない経営)

ふるさと納税やネット販売もあるが、逆に言うと多可町に来ていただいて商品を買って帰っていただくといったネットに頼らない方法で昔の原点に帰るような経営ができればいいなと夢のようなことを思っている。

(ネットのロコミが大きい)

コープこうべのアドバイスを受けて半年がかりでピローミストを作った。神戸新聞に掲載されたら作るのが間に合わないくらい売れて驚いている。来園者の増加はネットのロコミが大きい。

(自慢の商品をチームとして発信)

今日はみなさんがそれぞれ自慢の商品を持ち寄っている。多可町全体がこんな人たちのネットワークを形成し、一つのチームとなって発信していけたらということを感じた。

(地域商社で特産品販売と人材育成)

4月から地域商社を立ち上げ多可町の魅力ある商品を消費者へ届けている。町内に眠っている人材を拾い上げていきたい。地域の皆さんと協力連携し、多可町の良さをPRしていきたい。

(移住者も一緒に活動)

県道沿いの花壇の整備をしている「的場花クラブ」で、地域の者と一緒に移住者3組も活動している。移住者は考え方も明るく、こちらにも刺激をもらえる。例えば地元の者は多可町を不便な所と思っているが、移住者はJAのスーパーが近くにあるし大阪まで車で1時間もあれば行けるから不便とは思っていない。

(古民家空き家への受け入れは万全)

他地域から来た人に、この辺の良さは何ですかと尋ねたら、地元の方々が外からの人を温かく受け入れてくれることと聞いてうれしくなった。古民家空き家にやってきた人への受け入れ体制は万全だと思う。移住者で子どもを持っている方々は子供の養育にかかる手厚い保障を期待している。

(外国人技能実習生の受け入れ)

最近外国人の技能実習生を見かけるようになり、今後はさらに増えていくと思う。今のうちに地域社会で受け入れる仕組みを整備しないと地元住民との間で何か起こるだろうと感じる。

(家業を守る)

家業は呉服屋だが、ここ何年かで着物の需要が減り、他の関連商品を販売している。今一番力を入れているのが健康商品。健康に関するものだったら、お客様の関心も高い。100年続く家業を大事にしていきたい。

(多可町を「戻りたい町」に)

顔が見えるコミュニティがあるまちづくりが大事。町を出て行った子どもが子育てを機に戻ってきた。30年後もそんな町であってほしい。自然環境の維持、医療体制の整備、何でも相談でき孤立せずに子育てができることがカギだろう。

(子どもが集まるような仕掛け)

子どもたちの修学旅行の受け入れ、体験型の古民家空き家を利用した活動、特産品の活用、そうした楽しい仕掛けを考えれば、子どもたちにたくさん来てもらえる。そのうち人口も増えると思う。

(交通インフラ整備の必要性)

都市に比べて空気が良く自然の中で遊べる、魅力がある地域。若者に残ってもらうためには交通網整備が必要。今は滝野社インターから地道で多可町まで40分かかる。高速道路アクセスを整備したら若者は都市へ遊びに行き易く、多可町は住みやすい場所として定住の可能性が出てくるだろう。

(地域や祖父母による子育て支援の重要性)

昔は地域ぐるみで子育てをしていた。TV や新聞で報道されている虐待事件が起こるのは、水くさい世の中になったからだろう。昔は長男夫婦との同居が一般的で、祖父や祖母が子どもの面倒を見ることが普通だった。かつては祖父母に聞いて解決していたことも、今は核家族化が進んで聞く相手がおらず、孤立して虐待をするのではないか。

(子どもに安全な環境を)

小学校通学路の車道と歩道間の植栽が、5月～7月になると雑草が背丈までの高さになる。中学生が堤防を自転車で通学しているが、雑草で見づらくタイヤが川にはまらないか心配。子どもの生活に安全な環境が必要だ。

(田舎の良さを伝える)

地域では高齢世帯や空き家が多くなり、子どもの数が減っている。高齢になると医療関係のことが心配で転居される方もいる。私たちの責任は田舎の良さを伝えることだ。

(地元で働く場を)

大学を卒業すると都会で就職する。地元に戻りたい気持ちがあるが、地元で仕事があるのか情報を得る方法も少ない。若者が地域に戻ってきて働く場があることや、定年を迎え戻ってきて働く場があることが大事と思う。

(テレワークで都会並みの仕事ができる)

30年後の日本はテレワークが進んでいる。地方においても大都市の企業並みの仕事ができる時代なら、家賃の安い地方で企業がオフィスを構えるようになり、若い世代がたくさん定住すると思う。

(飯米のPRも必要)

この辺りは山田錦を作っている家が多いが、寒暖の差があるので、魚沼産に負けないくらい美味しいコシヒカリも取れる。山田錦はPRしているが、飯米の方はPRしていない。大阪の米穀店に卸しているが多可町のお米は美味しいと人気だ。

(伝統行事をつないでいく)

先人から田舎の伝統行事や祭りを引き継いで守ってきたが、私たちの代からは繋げられていない気がする。30年後、テレワークでこの地域に来た若者に地域の伝統をつないでいくにはどうすべきか。

(北播磨を高年齢者特区に)

北播磨・西脇はちょうどいい田舎。都会のように窮屈でもなく、生活していて不便も少ない。公共交通は不便だが、街よりも物価は安い。リタイヤ組や都市部の高齢者を受け入れることで、新しい産業や事業を興し、若者を雇用することができるのでは。

(30年後の未来は山が中心)

81年のポートピア博では海側や海外に向かって未来が進むイメージがあったが、次の30年後は北播磨地域の山の中に向かうイメージが良いのでは。北播磨に県庁を持ってきたらいい。山の中でも今はオンラインで仕事もできるし、南海トラフ地震によるリスクも回避できる。

(地域は総論賛成、各論反対)

地域の役員は「若い人の時代だから頑張れ」と言ってくれるので「じゃあこういうことをしよう」と提案すると、「いい話だが私が区長の間はやめてくれ」と言われる。次の区長に持って行くとやはり「私が区長の間はやめてくれ」と言われる。その繰り返しで心が折れてしまった。行政に言っても「いい話だが地域の了解を得ないといけない」と言われる。

(児童数が減少)

西脇市の人口は、合併時4万5千人くらいだったが、現在は4万人を切る状態。私は子育て世代で、中学校から4歳まで4人の子供がいるが、小学校の児童数がどんどん減っている。どうなっていくのか心配。

(個人事業主が集まる町に)

アウトソーシングを仕事としていて、西脇市を個人事業主が集まる町にしたいと思っている。一人二人、三人と起業して、それに対して報酬を得る。ビジネスを始めるには、いくら能力があっても壁があるものだが、その壁を超えやすい町になると魅力的だと思う。

(自分から能動的に発信できる子どもを育てる)

次世代の子どもには論理的思考を身につけてもらいたい。技術革新が進み利便性が増していく中で、それをうまく生かせるように、自分で論理的に思考し能動的に発信できる子どもが育ってほしい。

(分散と個性の時代)

これからの時代は分散と個性の時代。地域でパイの奪い合いではなく、これまでになかった発想や思いで何か輝けるものを生み出す。一人一人が個性を持って輝けるような未来であれば、子どもたちにも夢をもって託せる。

(ビジネスに場所は無関係な時代)

ビジネスをするのに場所は無関係な時代になってきた。西脇市から海外を相手にする時に場所での利益不利益は全くないと肌で感じる。土地代も安くかえってメリットを感じている。ただ、若い経営者の横のつながりがなく、やりにくいと感じるところもある。

(大都市一極集中が見直され、西脇市にチャンス)

新型コロナウイルスの影響で材料が入って来ず、工事現場がストップした。しかし、このコロナ禍で東京などの大都市一極集中が見直される流れがあり、西脇市にとってチャンスが来た。東京大阪に住まなくても、西脇市の広い家でテレワークで仕事をすることができる。積極的に移住促進につなげたい。

(外国人との共生の仕掛けが必要)

外国人労働者が多いが、彼らとコミュニケーションできる場所がない。たとえ有期雇用であってもせつかく西脇に来てくれているのだから、行政が交流する場所などを作って、少しでも良い思い出を持って帰ってもらうなどの取組が必要では。

(空き家、廃校舎の活用)

吉川は大変住みやすい町だが、少子高齢化が進み空き家が増加している。廃校になる小学校もある。それらを活用し、地震の際の世帯避難所として活用する。それをきっかけにして吉川町への移住につながるのではないかと期待している。

(地方部の通信環境整備が必要)

コロナ禍で大阪などからテレワーク・移住に関する問い合わせを多数受けたが、光回線が充実していない。関電の eo 光は入っているが、NTT のフレッツ光が入ってくれない。個々の住宅や新しいアパートは設備が整っているが、古いアパートなどは取り残されている。

(雇用確保のために産業団地が必要)

町民の中でも特に若者が定着するためには雇用の確保が重要。吉川町は中国自動車道、舞鶴近畿道、山陽自動車道の高速道路が整備されていて非常に交通アクセスが良い所だ。子どもたちの将来の雇用確保のためにも産業団地の開発が必要だと感じる。

(公立高校にゴルフ部創設)

高校生のゴルフ部創設の応援をしていただきたい。ゴルフ部からプロゴルファーが誕生し活躍すると、話題性ができる。ゴルフを通じて若者が集うような活気のある町づくりをお願いしたい。

(北播磨を高齢者の安心モデルタウンに)

買い物もしやすく医療も充実して受けられるメリットを生かし、北播磨を高齢者を呼び込むモデルタウンにする。シルバーの労働力の供給源となって企業を呼び込み、優秀な外国人も来てくれるような先進的な地域とする。

(物流のさらなる充実)

吉川は高速道路を活用した物流拠点としては一等地だが、陸だけでは弱い。この地区に貨物機が着陸できる空港がほしい。空と陸をつなぐ巨大な物流ネットワークを構築し、人と物を増やしていくことが重要だ。

(環境問題をゴルフ場からもPR)

日本有数のゴルフ場立地を誇る兵庫県で、7月からビニール袋有料化が実施された。県の環境問題にゴルフ場も特別に取り組んでいることはPRになると思う。

(若者が伸び伸びと活躍できる農村づくり)

北播磨地区は兵庫県下の20%の耕地面積を誇る農業大国。30年後も農業で北播磨の未来を築くために、さらなる農産物のブランド化、または品質向上が不可欠。

田舎は非常に閉鎖的な人が多く、新しい若者が自由に伸び伸びと活躍できるような農村づくりが必要。他の地域から入って就農でき、さらに生き生きと経営ができるようにしないといけない。

(変わらないことが新しい価値)

何かを建設して吉川が発展するという考えではなく、「変わらない吉川」という良さが新しい価値になってくる。30年後も変わらない吉川にたくさんの人が集まってほしい。

(老も若きも外国人も元気があるまちに)

活気があって、老も若きも外国人も、元気がある雇用の場になればいいと思う。

(郊外型の農業は魅力)

交通の利便性の良さを生かした郊外型の農業は魅力がある。県、市、地域、農協などが協力し、地産地消で地域の自給率を高めたい。

(息子たちに胸を張って残せる地域に)

私たちの世代は自分が家を守らなければいけないという気持ちがある。これからは「農業をやりた
いけれどできない」という状況になるのが目に見えているが、将来、使われなくなった田畑を生か
していけるようになったらと思う。30年後、息子たちに胸を張って残せる地域でありたい。

(三木を田舎の中にある都会に)

三木はものすごく田舎でもなく都会でもなく住みやすい地域。どこに行くにも交通の便がいいが、
逆に考えるとどこからでも三木に来やすい。田舎の中にある都会というイメージでネスタリゾー
トのような最新のものを取り入れていけばいい。

(スナックゴルフで町を元気に)

誰にでも簡単にできるスナックゴルフを通して町を元気にすることを掲げて、小学生のジュニア
ゴルファーを増やす活動に取り組んでいる。30年後は健やかな子どもたちであふれる笑顔でに
ぎわう町になればいいなと思う。

(生活そのものが生きがいになるような地域づくり)

30年後は今より少ない労働時間で同じくらいの収入が担保される。自分の時間が増え、やりたい
ことや欲求を満たせる。時間の使い方がわからない人も出てくると思うが、時間を無駄に浪費する
場所や物を作るのではなく、生活そのものが生きがいになるような魅力的な地域にすることが大
事だ。

(三木をゴルフとアスリートのまちに)

今は生徒たちのスキー合宿がよく行われているが、それに代わるゴルフ合宿を普及させ、市内外、
県内外から人を呼び込みたい。合宿地は廃校を活用し、三木にはネスタリゾートやホースランドな
どの野外を中心としたレクリエーション施設も多いので合わせて活用する。廃校を活用してスポー
チチームの合宿やキャンプの誘致をしたらいい。こうした取組は観光にも波及していくだろう。

(教育の充実が必要)

今の教師は30年後の未来を見据えて学習指導ができていないのか不安。プログラミングが苦手な先
生も多いと思うが、今後AIやロボットが普及していく中で必須の項目であり、先生方はそれに気
付いているだろうか。将来がこうなっていくから、今こういう教育をしている、ということの子ど
も達に分かりやすく伝えないといけない。

(新しい技術に取り組む)

生産方法がどんどん変わってきている。いろんなセンサー、ソフト、ハード、新しい技術がいつば
い出てきている。大手は取り入れているが中小企業はちょっと敬遠しがち。年齢的に体力が落ちて
も、いろんな技術でカバーすると生産人口も少し増える。いろんな工夫で業界を豊かにしていけれ
ばと思う。

(工事の現場はリモート対応が困難)

大手ゼネコンはともかく、建築工事の現場ではリモート対応はできない。単価も良くないので、若い子が入ってこない。60代でもまだまだ即戦力。夜中の3時まで仕事することも多く、余暇を楽しむ余裕がない。

「ビジョンを語る会」主な意見 多可町八千代区コミュニティグループ（マイスター工房八千代）

実施日： 10月14日(水) 人数：20人

（頑張れるのは皆のバイタリティー）

コロナで1か月休んだが、皆が働きたいということで、密にならない対策をして、店頭に来られる客に巻き寿司を300本近く、デパートに1500～2000本近くを売っている。20年間頑張ってきたのはスタッフたち皆、バイタリティーがあって頑張ってくれているからだ。

（若者の雇用確保）

多可町は若者が働く場が少なく、外に出ていったままだ。30年後とは言わず近い将来に働ける環境を整備し、若い人が戻って来られる地域にしないといけない。マイスター工房のように活気があってお客さんが多く来ているところもあるが、地域全体が同じように切磋琢磨し、町を盛り上げていくことが必要だ。

（小学校の廃校）

私の長男は、結婚して子どもが小学校に上がるまでという約束で多可町の外へ出たが、その小学校が廃校になって「もう地元に戻る意味がないのでは」と言われた。子どもたちが集える学校もなくなると、ふるさとの魅力がなくなっていくのではないかと寂しい気持ちだ。

（お年寄りに優しい町に）

スーパーに高齢者がタクシーで来ているのをよく見かける。家に送迎する人がいないのだろう。30年後に自分が年寄りになったとき、どうなっているのか不安になる。近くに病院もないし、バスも一時間に一本しかなく、バス停も遠い。お年寄りに優しい町になって欲しい。

（若い人もお年寄りも働ける場所）

廃校になったところに新しい会社ができ、80歳の主人が勤めている。今までボイラー一筋で、ボイラーや汚染水質、大気汚染に関する資格があり、役立たせてもらって喜んでいる。若い人もお年寄りも働ける場所が30年後も続いたらいいなと思う。

（多可町には何かが足りない）

子供たちは大学で京都や大阪に出ると、そこに就職して帰ってこない。Uターンして帰るにも就職先がない。教職員になった子供は地元に戻ってくることができたが、多可町をでて小野市辺りに住むことを考えている。多可町には何かが足りないのかなと思う。

（長く勤めたい）

10年ほど、マイスター工房八千代に勤めている。健康に気をつけて長く勤められるように心がけていきたい。

（マイスター工房が賑わいを生んだ）

八千代区の何もない所にお店ができて、お客さんを全国から八千代区まで引っ張ってきたことに感心している。マイスター工房のおかげで賑わいができ、地域が潤い活性化しており、勤めや生活ができてありがたい。

（人間性が大事）

マイスター工房八千代の誇りは施設長の人間性。マイスター工房八千代の技術は名高いが、人間性も大事だと思う。

(75歳でも頑張っている)

私は炊飯の係で、美味しくご飯が炊けた日などいろんな日があるが、男性3人に手伝ってもらって75歳でも頑張っている。マイスター工房がますます発展するように願っている。

(お年寄りに住み良い町に)

近くに診療所はあるが、週に何回かしか開院していないため他の病院に行かなくてはいけない。バスも1時間に1本しかなく、バス停も遠い。大きなバスでなくてもいいので、病院などを回るバスが走って、お年寄りも生活しやすい町になってほしい。

(学校の統廃合)

孫が「また部活がなくなる」などと話をする。この先はどうなるのだろうかと思う。子どもなりに「統合するのかな」と話しているのを聞くと、八千代区の将来に不安を感じる。

(古民家再生)

「新しく家を建てるよりも古民家を再生させる」という国の説明を聞いている。田舎の地域をもっと活性化させることを期待している。

(マイスター工房で働くことが自慢)

マイスター工房八千代に勤めていることは自慢。有名なマイスター工房八千代で働けることがうれしい。

(仕事ができる多可町に)

孫たちも近くで仕事ができ、生活ができるような多可町になれば希望が持てる。

(雇用の場がない)

娘が就職活動をしているが、家から通いたいのに雇用の場がないので町を出てしまう。地域的な課題があるのが残念。

(休耕田の維持)

田んぼが3反あるが、維持に困っている。多くの田畑を休耕田にし、どうしたらいいのかわからない。最近、都会から田舎暮らしに来ている方に野菜作りのために田畑を貸している。

(働く場があることに感謝)

私の年齢でも勤めがあることは周囲に羨ましがられている。周囲は過疎化しているのが現実で、私たちが働く場があることに感謝している。

(空き家整備の重要性)

空き家が増えているが手離さない人が多いので活用が進まない。若者が田舎で在宅ワークを行える受入れ施設として、空き家活用を行うにあたり、地元の協力・理解を得ることが一番のハードルだ。「空き家が増える、若者が出て行ってしまい寂しい」と言う前に、空き家を賃貸とし、活用しやすくする取組を進めていかないといけない。

(この先が不安)

私の息子は障害があり作業所でお世話になっているが、コロナで自宅待機をしていると、この先が不安になる。今後30年で空き家や休耕田が増えるが、これから先をしっかりとどうすべきか考える必要がある。

「ビジョンを語る会」主な意見 北播磨管内農業関係者(農業経営士、営農組合長、新規就農者)

実施日： 10月21日(水) 人数：11人

(農業の厳しい現状)

コロナ禍で日本酒需要が減っている。山田錦農家はいよいよ厳しいが、労力的にも投資費用的にも畑作への転換は不可能。稲作の次の展開を考えなければならない。今のAIの進歩は5年刻みで変わっていくような速さだ。1年後3年後5年後ともっと短いスパンで、どうあるべきかの理想像を具体的にしていく必要がある。

(若者への期待)

女性の農業者グループで、加西の野菜や米の美味しさをPRしている。若者の農業研修や「トライやる」も受け入れて、いま若者がどんなことを考えているかを知るように努めている。地域全体で農業を盛り上げたい。

(新規就農・Iターン就農への期待)

ブドウをやりたくて神戸から三木市へ移住。今は農業が楽しい。子育てや暮らしの環境面でも恵まれていると感謝している。よそ者だが、この美しい里山や田園風景を残したいと心から感じる。後継者不足も大きな課題。農業をしたい若者が「農業はハードルが高い」と感じているのが残念。田舎や農業のイメージを一新して、どんどん新しい人に入ってほしい。Iターン者がどんどん農業に参入することで、農家の子息も「俺もやろう」と思ってくれるかもしれない。そのためにはIターン就農への支援が大切。新規就農は、経営開始から1・2年が恐ろしいほど収入がなくて挫折の原因になっている。

(農家の直面する苦難)

コロナ禍の影響で日本酒の売り上げが良くないので、もうすぐ種の買い付けの時期がくるのに来年の方針がまだ出ていない。今は収穫時期だが、海外の日本酒用米に用途変更してくれと農協からお願いが来た。収入も安定せず農家として不安な毎日だ。高齢化で山の手入れが十分にできず、里に下りたイノシシに田んぼを丸々1枚食べられるなど、色々な苦難がありながら農業をしている。

(都市近郊に近い立地を生かす)

北播磨は神戸、阪神、大阪と大きな消費地に近い。近隣の都市部へ野菜を直送直売できる仕組みができればいい。味と鮮度で比べれば消費者は北播磨の新鮮野菜を選ぶはず。農家も営業努力が必要。農家と地域や県が一体になって、鮮度と品質を求めて直接流通できる仕組みができれば面白い。

(農業は可能性のある魅力的な産業)

この地域は都市圏からのアクセスが比較的良好で、この地域での農業は可能性のある非常に魅力的な産業である。ぶどう栽培の発展を目的として、北播磨ぶどう王国復権推進協議会プラチナぶどうの会青年部を立ち上げた。若手生産者が集い日々技術研究をしている。都市近郊という良い立地を生かし、観光を含めた複合的な大きな施設と連携することができたらいいと思う。

(新品種開発への意欲)

消費者の嗜好はどんどん変わっていく。私も意欲をもって新品種を取り入れて、ぶどうを栽培、販売している。米についても、30年間山田錦だけでやり続けるというのは考え直すべきではないか。ぶどうも米も兵庫県限定のブランド力のある品種を開発して取り組んでみるのはどうか。

(若い農業者を育てる)

生産者の高齢化が進み、ぶどう農園の廃園が増えることを大変危惧している。そこで、町内の若い人たちで農業者グループを作って、農地をどうやって保全していくかを話し合ったり、地域の将来について協議したりしている。研修生を受け入れて後継者の育成にも力を入れている。それぞれの地域で若い農業者が育てば、その地域が発展し30年後も安心して農業ができる。

(新規就農者の受け入れ体制を作る)

消費者の大粒系志向によりベリーAの作付面積が減った。半分くらいの面積減で収まっているのは、新規就農者が知恵を絞って大粒系を植え、自分の力で販売し所得を増やし加西市のぶどうを担ってくれているお陰だ。産地自体が新しい人をよそ者扱いしないなど、受け入れ体制を作らないといけない。

(地域の特産品を循環型農業で)

牛肉生産は環境に良くないという意見もあるが、今の時代はそういった環境問題も考えていく必要がある。耕地農家と連携し、山田錦の稲わらを使って牛を育て、牛の糞を堆肥として田に還元していく循環型農業について、もう一度掘り起こし取り組みを広げていってはどうか。

(北播磨の農業が続いていくために)

北播磨は京阪神の後背地域であることから、こだわりをもって作ることができれば新規就農者を受け入れるだけの素地がある。今後はスマート農家という技術が発達していくだろう。その技術をうまく活用して、担い手、新規参入者を育てて行くことで、北播磨の農業が続いていく。地域が農業を支え、技術を進化させ、次の世代に引き継ぎ育てて行くシステムが必要だ。

(北播磨は宝を持っている)

小野のそろばん、三木の刃物など、北播磨には他産地からみればよだれが出るような宝(商材)がたくさんあるが、産地はそれに気づいていない。モノは作れるけれど販売ができない。幕張メッセでは見せ方ひとつで変わるという経験をした。インターネットの普及で販売方法も変わった。それをうまく使う販売アドバイスができるようなバックアップがあれば十分まだまだ伸びていける。

(シャッター商店街)

小野商店街は 800 メートルという県下で珍しい規模の長い商店街だったが、もはやシャッター商店街となっている。地元を大切にしたいと考えている我々には非常に残念で、地元商店街や地元企業の元気が出るような施策を打ち出してほしい。

(外国人の雇用)

家業は園芸用刃物の製造。社員が高齢化し新しい人を入れなければならないが、職人は育てるのに5年くらいかかる。外国人は3年から5年で国に帰らなければならないと聞いた。5年かけてものづくりができるまでに成長した頃に帰国してしまうと、職人として活躍する時がない。雇用政策を検討してもらいたい。

(働き先に地元を選んでもらえるように)

この辺りの市町村に住む人は神戸市や明石市に職場を求める傾向がある。若い世代はプライベート中心に考えているようなので、プライベートの充実するまちづくり・コミュニティづくりによって、地元で働けて、自分で時間に融通がつけられるような生活環境を整えることで若者を引き留められると思う。

(人手不足、人材難が課題)

地場産業の刃物を家業としているが、外注先の高齢化が進んでいる。内製化したが、事業継承に問題がある。人手不足、人材難が一番課題だと思う。

(北播磨に住む外国人の願い)

小野市では今 930 人弱の外国人が住んでいる。私が所属している小野市国際交流協会では、数年で帰国する技能実習生に30年後について聞いたところ、交通の便を良くし楽しい娯楽施設をつくらしてほしいということだった。長く住んでいる定住者に聞くと、今の北播磨の平和、安全やリラックスできる雰囲気はなくしてほしい、大事に残すべきだということだった。

(「そろばん工房館」をつくり観光資源にしたい)

そろばん生産の拠点を1か所に集約し、小学校の社会科見学や製作体験を行う「そろばん工房館」を整備し、観光の資源の一部にしたい。そろばんで小野市に誘客し、買い物、体験をしてもらってお金を落としてもらい、近隣も回ってもらう。そうした流れをつくりたい。

(新しい人の流れ)

旅館を3代に渡って営んでいるが、ここ50年でお客の種類が変わってきた。道路網などの交通インフラが整備されるに従って、泊まらなくても仕事ができるようになり土木作業員やトラック運転手の利用が減った。ここ10年はスポーツ合宿で来る子供の宿泊が増えた。仕事以外のレジャーでの人の流れや子ども達の流れをつかんで新しい何かを考えていきたい。

(都会に住まなくても仕事ができる)

今までは週 1 回本店に行って会議をしていたが、コロナ禍で Web 会議になり、勤務地が離れていても仕事ができるというのを肌で感じている。最近、市内の若い方で自宅でもできる仕事で会社を立ち上げる人が増えてきた。都会に住まなくても小野市に住んだまま仕事ができる。そういった新しいことを地域に根付かせていきたい。

(所有者不明土地への対応)

所有者不明土地、名義が何年も前の最初から変わっていない土地、売買の際に所有者が何十人もいて困っているような土地がある。価値がある田はすぐ相続するが、価値のない田は相続したがいという現状である。もっと簡単に田んぼや土地を放棄できる仕組みがあればいいのと思う。

(子ども達が動ける交通基盤は引き続き必要)

子どもたちが買い物等で都市部に出るためには、やはり鉄道などのインフラは必要であり、残す必要がある。働き先を考える人からも、交通事情が悪いから小野市は住みづらいという声がある。

(「おの恋村」をつくり魅力発信の拠点にしたい)

食の提供や地場産品の生産の拠点、地域住民の憩いの場となる「おの恋村」をつくりたい。若い人も呼び込むためには、他の地域から多様なことができる人が入り、力を合わせて運営していけるような組織づくりが重要である。

(山田錦と金物、掛け合わせて魅力を増す)

新潟県燕三条市のレストランでは、地元で醸造した日本酒を地場産業の金物のグラスに入れていた。農・商・工の連携、横のつながりがうまくできていた。北播磨でも世界に通用する山田錦と地場産業の金物の連携が地域活性化につながるのではないかと。

(マンパワーをアジア、アフリカからの移民に求める)

予想される将来の人口減少の中で、今の産業を維持していくためには一定のマンパワーが必要で、アジアやアフリカからの移民が一つのポイントになる。そういった人たちを受け入れるために産業の整備、言語の問題が北播磨の課題になると思う。

(商店街をIT技術で改革)

商店街の過疎化が深刻な状態になっている。高齢化のうえ後継者不足による廃業が多い。私の考える将来ビジョンは、インターネット、IT技術の導入による商品の販売と宅配サービスの充実だ。また、商店街の入り口に大きなタッチパネル式の案内板を設置し、簡単に店舗検索をして迷わずその店に買いに行ける「商品検索ができる商店街」を目指したい。

(小さな工場の強みは人とのつながり)

自動車整備の仕事はお客さんと離れてはできない。直接会って話を進めていく仕事だ。小さな工場なのでディーラーにはない人情や人とのつながりを大切にしたい。商売をしようと考えている。こんな時代だからこそ今後も人とのつながりを大切にしていきたい。

(北播磨は交通の便が悪い)

北播磨地区、特に加東市は交通の便が悪く車がないと不便。鉄道の駅が少なくバスの本数も少ない。電車やバスの便がよくなると町も活性化すると思う。また、空き地や荒れている田圃も目立つが、そういう場所も規制をゆるめ家を建てやすくすると人が増えて交通への需要が増え、バスや電車の本数も増えるのではないかな。

(コロナ禍をチャンスとして移住促進を図る)

コロナ禍で都市部から田舎への移住が脚光を浴びている。交通インフラを充実させ、自然の豊かさ食べ物のおいしさなどの北播磨の魅力をアピールする絶好のチャンスだ。さらに子育て、教育、雇用、仕事環境のサポートを充実させ、若者世代の移住促進を図れば北播磨が活性化していく。

(魅力的な所でないと人は住まない)

テレワークが進んで、どこに住んでもいいようになればなるほど、魅力的な所でないと人は住まなくなる。会社が魅力的でないとお客さんが来てくれないのと同じだ。

(北播磨がフランスブルゴーニュを超える地域に)

この一帯は山田錦の特A地区であり、全国の酒蔵はこの辺りの田んぼを取り合いにしている。この地域をフランスのブルゴーニュを超える地域にしようと、酒蔵と地域が一体になって、日本の酒を世界に発信する活動をしている。しかし、実際はかなりの農家が赤字で、苦しみながら続けているというのが現状だ。高齢者から若者へのバトンをどうつないでいくのが課題である。

(人口減少に合わせた社会づくりのビジョンが必要)

人口はここ 100 年ほどで増えているが、江戸時代や明治時代は今より少ない人口で社会が成り立っていた。その人口に合わせた社会づくりが大事。AI やロボットを使いながら労働力を補完していく必要がある。

(今の自然環境を守りたい)

この地域の自然環境を大事にしたい。私は一時、都市部に出ていたが、こっちに帰ってきて良かったと思っている。人口減がそんなに悪いことではないと思うので、できるだけ30年後も今のままでいたいと思う。

(魅力ある地域、観光スポットで人を呼ぶ)

自分の周りの人達を見ても、都市部で就職して地元に残っていないのが現状。地元の魅力ある企業があれば、若者が戻ってくるのではないか。加東市には有名なゴルフ場や武家屋敷もあるので、それが観光スポットになれば観光客を呼べて、北播磨地区にお金が落ちるのではないか。

(北播磨を一つのテーマパークに)

北播磨各市町の特長を持ち寄り、スポーツ大会は小野、学習施設が充実しているのは三木、高齢者施設がたくさんあるのは多可、単身者でも遊べる場所があるのは西脇といったふうに、最終的には北播磨全体で一つのテーマパークのようになればいい。

(中途半端な田舎をアピール)

加東市は良くも悪くも中途半端な田舎というイメージがある。大阪、神戸へ1時間で行けるけれど来たら何もないというイメージ。それを逆手にとって、中途半端な田舎をアピールする。大手の企業の誘致や医療体制の維持が、今後、田舎でやっていくには大事だと思う。

(地域が持つ個性を発信)

地域も人間と同じで、皆が同じだと面白くない。この地域も神戸や姫路、明石みたいになろうと背伸びしてもだめだと思う。この地域にしかない個性、それが目立たない地味なものでも、外に発信していけば興味ある人はやってきてくれる。

(子どもたちの創造力・行動力・チャレンジ精神を養うことが大事)

自動車学校として県内初のドローンスクールを開設し、小学校に出向いてドローンを使ったプログラミング教育をしている。未来では今想像できないような仕事が生まれているだろう。急速に変化する時代でも力強く生き抜いていける若者を育て、そういった若者が集まるような地域にしていきたい。

(人材確保の困難性、持続可能なスマートカントリー)

ものづくりはリモートの対応が難しく、現状は外国人技能実習生の現場労働に頼っている一方で、日本人の優秀な若手幹部候補生が確保できない。他地域から優秀な若手人材が集る大学や研究機関をつくらなければならない。特区などを活用して規制緩和を進め、ベンチャー企業が集まって最新技術を開発したり、外国人の採用を活発に進めたりすることのできる地方(カントリー)になってほしい。

(働く、学ぶ、遊ぶ、暮らす)

働く、学ぶ、遊ぶ、暮らすという4つの要素において便利な町になってほしい。「働く」に関しては産業団地の発展、「学ぶ」に関しては通学のしやすさ、「遊ぶ」に関しては自然や史跡を生かしたレジャー施設、「暮らし」に関しては行政、学校、医療機関の集約。そのためには交通インフラの整備と、土地を有効利用できるような規制緩和が必要である。

(「不便」に対する考え方が変化)

コロナ禍でリモートワークやリモートスタディが急速に進んだことにより、公共交通機関のアクセスに関しての不便さに対する考え方は非常に変わった。今後は、技術革新によって交通インフラがなくても、地域の特性を生かしたまちづくりができると思う。

(新規就農、後継者の育成の推進)

加西市と言えばモノづくりと広がる田園が美しい町というイメージだったが、残念なことにその景観が崩れてきている。水稻栽培の後継者が急激に減ってきているからだ。新規就農は誰もが簡単にできるわけではない。新規就農の規制緩和や水稻の後継者育成、集団営農の推進などを多角的に進めていく必要がある。

(尖った政策で30年後に魅力ある土地に)

30年後に兵庫県が魅力ある土地であるためには、尖った政策が必要だ。例えば、加西市はブドウが有名だが全部を畑にしてフランスを超える、地元の北条高校を5年制にして2年間は海外で単位を取るなど。世界で戦える人間を創っていくと、その魅力に他の市町村や県外から人が集まってくる。

(5市1町で北播磨市をスマートタウンに)

30年後の北播磨地域をスマートタウンにする。三木ならスポーツ特区、西脇なら果樹園などの農業特区というように、5市1町の現在の各市の特性を生かして、北播磨市という形で運営していく必要があると思う。

(子どもを社会全体で育てる)

中国香港にも会社の工場があるので20年間ほど行っていた。日本に帰ってきて、子育てしにくいという感じを受けた。自分が子供の頃にはあった社会全体で子どもを育てていくという雰囲気が、変わってしまっていた。少子化が進む中で、今から生まれてくる子供たちは本当に力を持たなければいけない。親に対しての各種援助は整備されていると思うが、それだけでは足りない。子どもを育てるのは社会全体だ。

(高齢者が住み良い町は現役世代も働きやすい町)

今は、働く世代が、集中して働ける環境にない。祖母が脳梗塞で倒れ医療のできる老人ホームを探しているが、なかなか入れない。父母もまだ働いているので祖母の面倒を見る時間が取れない。働く世代が負担なく働ける町になればいいと思う。高齢者が地域に支えられて住めるように、訪問医療、宅配弁当、オンデマンドバスなど、高齢者が住み良い町になるよう考えたい。

(土地の利用規制の緩和を)

9年前に工場の自動化とIOTのスペースが必要で工場建設のための土地を探したが見つからなかった。こんなに土地があるのに使えないことに葛藤があった。(4年前に加西工業団地に工場を建設できた。)これから成長しようとする事業主が簡単に土地を使えるような政策が進み、活性化していけばと思う。

(医療は広域的な考えで)

医療には地域格差があり、加西市外で治療しなければいけないことが増えている。また、救急車の搬送時にも、搬送先が対応できないなどで受け入れ先がなかなか決まらない。医療に関しては、加西市だけで全てという考えでは無理が生じるので、北播磨市というような広域的な考えで進めたい。

(人口減少を食い止める仕掛け)

人口減少が全ての悪循環の根源だと思う。家を新築するときの設計では子ども2人が基準になっている。3人の子どもを育てていけるような仕掛けができないか。突拍子もない政策を打っていかないと歯止めがかからないと思う。少しでも出生率を上げ人口減少を食い止めていかないと、30年後の未来を描いても、それは絵にかいた餅になってしまう。

(小児科の夜間救急の整備)

北播磨医療センターの診察は深夜0時までだが、子どもは0時を過ぎてから体調を崩すことが多いので、できれば朝まで診察してほしい。実際、消防にどこの病院に行けばよいか問い合わせると、加古川や姫路の病院を紹介される。体調の悪い子どもを1時間以上も車に乗せて管外の医療機関まで行かなければならない現状を非常に問題と感じる。

(子育てに社会の理解が必要)

妊婦や子育て世代を大事にしてくれる職場環境を整えてほしい。出産経験のある人は理解があるが、子どもがいないひとや男性は理解がない。育児休暇制度を整えることも大事だが、子育てを理解し、子どもを持つ親に優しい社会にしてほしい。

(幼児教育制度の充実)

子どもには、将来必ず課題は訪れる。その時に大事なのが困難に向かって課題を解決しようとする力。学校の成績や学歴ではない。それは幼少期にしかつけられない力である。そういう点で、この地域は大切な子どもを預ける幼児教育制度が充実している。

(男性の育児休暇の在り方)

職場の同僚の話を聞くと、やはり育児と仕事の両立は大変なようだ。今の男性の育児休暇は、限られた期間家にずっといることになるが、それよりも週に何日か時短勤務ができる方がいい。フルタイム勤務か時短勤務かをはっきり分けて選択するのではなく、フルタイム勤務で働きながら、必要に応じて「時短」で帰れるという形。

(出産に関する支援の充実)

明石から小野に来たが、産婦人科が非常に少ない。もっと増やしてほしい。産後ケアも手薄。市役所以外にも子育て相談にしっかり乗ってくれるような場所が欲しい。出産に関する相談窓口があればもっと前向きに出産を考えることができる。

(支援してほしいこと)

友だちに支援してもらいたいことは何か聞いてきた。①小学校の給食費と教材費に対する支援。②アフタースクールを6時以降も延長すること。休日(日曜)保育。③PTAを簡略化し保護者の負担を軽くすること。④子どもの数を増やすには3人目以降への手厚い補助が大事。補助の制度の周知をもっとした方がいい。

(男性の意識改革)

夫は言えば何でもやってくれるが、やはり育児への認識や心構えが足りない。もう少し男性の育児に対する気持ちを母親並みにできないか。足りていないと思うことが多い。行動が伴っていない。男性を教育する必要がある。

(引越してきて良かった)

育児環境を良くしようと考え、神戸市から加東市に引越してきた。神戸市では、第5希望まで書いても保育園に入れなかった。児童館は学童のためという色が濃く、小学生のいない時間だけの利用で、夏休みや午後の時間帯は使えないなどの制限があった。加東市は児童館が3つありいつでも開放されているので気軽に行ける。先生とも話ができるし相談できる。引越してきて良かったけれど、勤務が遠くなったことが復職後の心配だ。

(子育て支援体制の地域格差)

三木市出身で、今は仕事と結婚で南あわじ市に住んでいる。里帰り出産でこちらに来ており、かとう GENKi や三木市の児童館を利用している。子育て支援に地域格差があり、南あわじ市には児童館や子どもの遊べる公園が不足している。産婦人科は都市部では選べるほどあるのに、淡路では島に1つしかない。どこに住んでも同じような子育てができるようになれば、3人目も前向きに考えられる。

「ビジョンを語る会」主な意見 西脇で活躍されている方(デザイナー、播州織関係者、移住者)

実施日： 12月17日(木) 人数：12人

(西脇市への企業誘致)

西脇市の課題は、働く場所がないことと人口減少。西脇市は素晴らしい地場産業である播州織に頼りすぎていて、地場産業だけでやっていけるという過信から、企業誘致に積極的でなく、今の低迷を生んでいるのではないか。今の子どもたちが、西脇市に働く場所がないを言って、出て行ってしまえばどうなるのか。西脇市への企業誘致、若手デザイナーの西脇市での起業などが望まれる。

(関係人口を増やす)

アーケード商店街や銭湯の跡を使ってイベントを開催している。前は 800 人を超える集客があった。京阪神からの出店者が多く、「次も出店させてほしい」「西脇の人は温かい」といった声がある。大きい企業を誘致するのも大事だが、それ以上に関係していく人たちを増やすことが大事だ。

(未来の働き方)

特定の会社に所属せず、テレワークのような働き方をする人が増えるだろう。都市部に住まずに好きなのところに住む。そういう人たちを受け入れる北播磨であるべき。「受け入れよう」「個人の頑張りを応援しよう」という空気感が大事だ。

(機屋の高齢化と若者離れ)

播州織の普及と維持、西脇市の振興を目的に活動している。播州織の機屋の高齢化や若者離れをどう食い止めるかを模索している。播州織の特徴である先染めの良さをいろんな人に感じてもらいたい。

(西脇市でも仕事ができる)

西脇市はバスや電車が少なく、子供たちにとっては不便な町。進学しようとする町に出るしかない。就職先もないので町に出ようとする人が多い。今、コロナ禍で、リモートワークが進んできた。西脇市でも企業の仕事ができることをアピールしていけたらと思う。実は、西脇市にも就職先はたくさんあるのに、地元にもあまり知られていない。もっと皆に発信できればと思う。

(地元資源への気づき)

西脇の人は「西脇には何もない」とよく言う。面白いところや魅力あるところがあるのに「何もない」という言葉にかき消されている。観光協会の依頼で観光マップを作っているが、「こんな情報は初めて知った」という声もあり、地元の人が地元のことを知らないと感じる。

(リモートが当たり前になる時代)

西脇には就職の場がないから、能力のある人は東京で就職してデザイナーとして活躍しており、もったいない。リモートが当たり前になってきたら、家で仕事をするのが普通で「昔は通勤ラッシュがあったのか」という時代が来る。そうなった時は、都会より田舎の方が子育てに適している。そういう流れをサポートする仕組みがあればいい。

(製造現場で働く人の増員が課題)

自社が得意とする織物を SNS や展示会で発信して、オリジナル性を出している機屋さんが増えて
いる。しかし、作る人がいなくなると続けられない。お客さんをつかんでいくと同時に、製造現場
で働く人をどうやって増員するかが今からの課題。地道な仕事で続けることが難しい。

(オリジナリティを出していく)

日本の地場産業は素敵なのにうまく発信できていなくて、もったいない。これからは個性の時代。
オリジナリティを出していけないと淘汰される時代が来る。今の時代にあうやり方で、新しいこと
に挑戦していく。また、人とのつながりや温かみはリモートではなかなか感じられない部分なの
で、デジタルとともにアナログも大切にしていきたい。

(播州織を残したい)

移住してきて織物元受けの商社でデザイナーをしている。播州織を残していきたいと強く思い、縫
製の工場を作った。今だと、中国の縫製工場に生地を持って行ってシャツに加工してから日本に戻
ってくるので、播州織なのにメイドインチャイナになってしまう。そこを変えていきたい。

(高齢者を置き去りにしないまちづくり)

大阪から移住してきた。家の近所に子どもたちが遊んだり、近所の人、高齢者が交流したりできる
ようなスペースを作った。まちづくりは大学の先生などの発想だけでは、現地の高齢者たちを置き
去りにしがちである。地元の間人が心配りをしたまちづくりができるようにしたい。

(子どもたち、若者が主役の社会)

30年後に幸せな社会にするためには、子どもたち、若者が主役になれる社会にしないとイケない。
高齢者が踏ん返り返って若者に指示するような社会にしてはいけない。今住んでいる地域はお年
寄りが多いし、若い人は入ってこない。何でも「例年と同じ」ばかり。それを伝統というなら、そ
んなものがあるだろうか。例えば消防団などは典型。その意義・仕組みを再考すべき。